

資料4 優良事例集

森林・山村多面的機能發揮対策交付金

優良事例集（令和6年度）



森林・山村多面的機能
發揮対策交付金
優良事例集
(令和6年度)



林野庁

目次

掲載団体一覧	2
掲載団体活動所在地	3
優良事例	
1 『森林整備を通じた移住者と地域の相互作用』 ほくりゅう里山クラブ（北海道北竜町）	4
2 『環境と経営を両立する森づくり』 山田町山守の会（岩手県山田町・宮古市）	6
3 『地元自治体と連携した里山林の整備活動』 木木木林（群馬県みなかみ町）	8
4 『萌芽更新ができる里山林の再生をめざして』 なかい里山研究会（神奈川県中井町）	10
5 『20年の活動がもたらす里山の再生』 NPO 法人里山環境プロジェクト・はとやま（埼玉県鳩山町）	12
6 『森林資源の活用で地域経済の好循環の実現へ』 木の駅上石津実行委員会（岐阜県大垣市）	14
7 『マウンテンバイクを核とした里山林整備』 萩の台里山保全の会（奈良県生駒市）	16
8 『里山林の再生が育む地域のにぎわい』 NPO 法人グリーンバレー（徳島県神山町）	18
9 『自治会主導の竹林整備(地域の憩いの場の創出)』 託麻東校区7町内自治会環境保全（熊本県熊本市）	20
10 『自治会主導の竹林整備(集約化と一体管理による竹林の再生)』 結里山保全活動組織（熊本県熊本市）	22
11 『自治会主導の竹林整備(タケノコの安定生産、伝統文化の保全)』 田畑竹林保全隊（熊本県熊本市）	24
12 『企業と連携した里山林整備』 イノホイの森保全会（宮崎県国富町）	26
13 『竹林資源の農業利用と活動の波及』 持続可能な里山めざし隊（鹿児島県大崎町）.....	28

掲載団体一覧

	活動組織名(活動地域)	活動タイプ				活動の特徴					
		里山林保全	竹林整備	森林資源	関係人口	資源活用／基盤強化	主体連携	情報発信	獣害対策	関係人口の創出	活動の波及による組織の新設
1	ほくりゅう里山クラブ (北海道北竜町)			●		●	●	●	●		
2	山田町山守の会 (岩手県山田町・宮古市)	●				●			●		●
3	木木木林 (群馬県みなかみ町)			●		●	●	●	●		
4	なかい里山研究会 (神奈川県中井町)			●	●	●	●	●	●	●	
5	NPO 法人里山環境プロジェクト・は とやま (埼玉県鳩山町)	●				●	●	●	●	●	
6	木の駅上石津実行委員会 (岐阜県大垣市)			●		●	●	●			
7	萩の台里山保全の会 (奈良県生駒市)	●				●		●	●	●	
8	NPO 法人グリーンバレー (徳島県神山町)	●	●			●	●	●	●	●	
9	託麻東校区7町内自治会環境保全 (熊本県熊本市)		●			●	●	●		●	
10	結里山保全活動組織 (熊本県熊本市)		●			●	●	●	●		
11	田畑竹林保全隊 (熊本県熊本市)			●		●	●	●			
12	イノホイの森保全会 (宮崎県国富町)	●	●		●	●	●	●	●	●	
13	持続可能な里山めざし隊 (鹿児島県大崎町)		●			●		●	●		●

掲載団体活動所在地



森林整備を通じた移住者と地域の相互作用

ほくりゅう山クラブ

設立年：令和2年度 構成員：7名

活動地域：北海道北竜町 林種：針葉樹林、広葉樹林

活動実績(令和6年度)：森林資源利用(11.7ha)

交付金 1,346 千円

資源活用内容：薪、木工品、スウェーデントーチ、シラカバ樹皮
クラフト用シラカバ枝、ササの葉

Email: tatsuya.kamii@gmail.com



活動の概要

北海道中部に位置する北竜町(ほくりゅうちょう)は、町内の約 70%を山林が占めますが、放置林が目立ち、ネズミによる食害や林床にササが繁茂するなどして風倒木・枯損木が増え、荒廃が進んでいます。ほくりゅう山クラブは、林業実務経験のある代表が北竜町にあるカラマツの人工林とシラカバの天然林を中心とした約 25ha の森林を購入し、北竜町に移住したことを機に、木こり仲間などと令和2年に設立しました。生物多様性の保全と持続的な森林資源の活用が可能な針広混交林とすることを目的に活動しています。代表が購入した森林のうち、11.7ha を活動対象として、カラマツ林で

は主伐を、広葉樹林では択伐林施業を目指して、現在はそれぞれ弱い間伐を実施しています。さらにつる切りや枯損木の除去、稚樹の成長を促すための必要最低限のササ刈りも行っています。



森林資源の多様な活用

薪、木工品、伐採木を活用したスウェーデントーチ、ロシアや北欧の伝統工芸用の材料として知られるシラカバ樹皮などをオンラインや道の駅などで販売する他、刈り取ったササは企業の商品開発に活用されています。

地域外の企業との連携

近隣の砂川(すながわ)市内に工場をもつ企業(本社：東京)と、知人の仲介を通じて連携し、ササの葉を原料とした商品開発に協力しています。同社は「自然が育んだ素材の力を最大限に引き出す」をモットーに国内外で事業を展開しており、林内で刈り取ったササが健康食品の原料として活用されています。



森林資源として活用しているシラカバの薪や樹皮、木工品とササ



活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

▶ 森林資源の搬出の推進

令和2年度からの3年間は「地域環境保全タイプ」で、令和5年度からは「資源利用タイプ」に移行し、森林資源の搬出に取り組んでいます。令和6年度の実績として、薪・木工品 26 m³、ササの葉 32 kg、シラカバ樹皮15m³、クラフト用シラカバ枝200本などを搬出しました。特にササの葉は令和5年の14kgの2倍以上の量となりました。

▶ 森が変わって深まった地元理解

薄暗い印象だった森が風通しのよいすっきりとした景観の森が変わったことで、活動に対する地域の理解が深まりました。その結果、隣接地の地権者が、敷地の一部や倉庫を活動場所として提供してくれたり、新たな支援に繋がっています。



活動上の課題、その対応策等

- 伐採後の森林資源の搬出は軽トラックだけでは困難なため、林業専用の運搬車両の新規購入を検討していました。金銭面で躊躇していたところ、地元農家の方の紹介で、隣町の機械屋さん、中古のコンバイン(稲刈・脱穀・選別複合農機)をフォワーダに改造してもらうことができ、結果として、実用性が高い改造運搬車は、林内作業に不可欠な存在となりました。



農業用コンバインを改造したフォワーダ

- 移住者として活動開始当初は、地元の人々との関わり方に悩むこともありました。自身で購入した活動地とはいえ、隣接する山主との折衝などを重ね、「地域の森を良くしたい」という気持ちを伝え、地道に整備を進めていくことで、山主の方々だけでなく、地元の農家や役場の方々とも良好な関係を築くことができました。

今後の展開

- 地元の方や若い世代の目が北竜町の森に向くようなイベントなどを企画・実施し、森林整備にチャレンジする機会や環境を整えることで、新たな活動員の確保・育成に力を入れていきます。
- 森林資源を有効かつ持続的に活用して、生計を立てていけるようにしていきたいと考えています。産出木材の販売などを通じた活動継続のための資金確保の方法を模索しています。その例として、シラカバをホテルの内装材として活用できないかなど試行中です。

他の活動組織への一言アドバイス 本交付金を利用してよかった！

最初から無理をせずにできるところから始めつつ、活動を長期的に行うために森林資源をどう持続的に利用するのかビジョンをもつことが大切です。また、交付金終了後のことも考慮して、活動継続を目指した森林資源活用のためのビジョンをもっておくことも大事なことだと思います。

森林整備をするきっかけとして本交付金の存在はとても大きかったです。ササが密生していた森が安心して入れる心地よい森に変わり、地元の方からも「手を入ると山はこんなに変わるのか！」と言ってもらえるようになりました。また、活動地の森に対する見方も変わり、興味をもって北竜町に集まってくれる人が増え、山から人の輪が広がっているのを実感しています。

伐採木を活用したスウェーデントーチ

環境と経営を両立する森づくり

やま だ まちやまもり かい
山田町山守の会

設立年：令和4年度 構成員：5名

活動地域：岩手県山田町・宮古市 林種：針葉樹林、広葉樹林

活動実績(令和6年度)：里山林保全(11.0ha)

交付金 1,210千円

資源活用内容：薪

Email: mikajiri.ringyo@gmail.com



活動の概要

岩手県山田町は、三陸地方の太平洋に面する町で、町の総面積の約9割を森林が占めています。本交付金の活動地は、長年放置された樹齢30～70年生以上の広葉樹とスギ・アカマツの混交林で、林内は暗く、見通しが悪い上、枯損木も多く危険な状況となっており、シ



力やクマなどが道路や集落周辺に出没する例が増えるなど、獣害の深刻化が懸念されていました。

そこで、長年放置され、手入れ不足となっていた森林を、幼少期に遊んだ本来の豊かな森へと回復・再生するため、令和4年に山田町山守の会を設立し本交付金

活動を開始しました。活動地11.0haでは、雑草木の刈払い、つる切り、枯損木・風倒木等の処理、除間伐などを実施して、見通しや景観改善などの作業を行っています。現在は、森林整備と作業道の整備が中心ですが、スギの間伐材と広葉樹の一部を薪ストーブ用の薪(令和6年度は薪用丸太約3,000kg)に加工し、山主や構成員で利用しています。

森林の健全度を重視した施業

以前勤務していた林業事業体では、収益性の確保が優先されていました。本交付金活動では、「生まれ育った山を、本来の豊かな森へと回復・再生させたい」という強い想いをもって、地形や疎密度、育成状況など、森の状況に応じたより長持ちする壊れにくい作業道の作設や、選木する際には良い木を残し悪い木を切るやり方で間伐を実施するなどきめ細かな整備作業を行い森林の健全度を高めています。



地元市町村主催の市民向け研修に協力

山田町、宮古市、九戸村などの自治体を実施する市民や森林所有者、地域おこし協力隊などを対象とした研修会の講師を務めました。技能の向上と事故防止を目的とした研修で、チェーンソーの使い方やメンテナンス方法、伐倒技術等を教えています。交付金活動で得た経験や知見を横展開することで、担い手育成や放置林整備の促進に貢献しています。



技能の向上と事故防止を目的とした市民向け研修の様子

より長持ちする壊れにくい作業道を作設するための作業(上)



活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

▶ 作業道整備とナラ枯れ被害地への植栽

交付金活動の3年間で、作業道の整備や除間伐した灌木類の集積などに力を入れました。ナラ枯れ被害木の伐採地にはスギ等の苗木を植栽しました。これにより、見通しや景観も大きく改善し、材を出しやすい環境になりました。本交付金のモニタリング調査の数値目標として、林縁部からの見通し30mと設定していましたが、いずれの活動箇所も達成度100%以上となりました。



ナラ枯れ木処理作業前・作業中(左2写真)ナラ枯れ跡地造林(右2写真)

活動上の課題、その対応策等

- 森林内におけるナラ枯れ被害が深刻化しています。順次伐倒を実施して対応していますが、近年は若く細い木にも影響が出るなど、被害の拡大傾向が見受けられ、実効性のある根本的な対応策を模索中です。
- クマの出没情報が増加し、また行動様式の変化した個体がいることも考えられる中、「見通しをよくする」などの対策を講じるほか、入山時にクマ撃退用スプレーなどの携行を義務付けるといった安全管理に努めています。

今後の展開

- これまでの経験を通じて、森林整備だけでなく、森林を扱う上で必要な図面や書類、各種届け出や情報の取得方法、対象の森林の場所の特定など関連する多様な知識も得ることができました。そのノウハウを基に、今後は近隣森林所有者への働きかけ、隣接する宮古市の森林も対象地として拡大していきます。
- 本交付金を活用して整備した森林について、「環境重視の美しい森づくり」と同時に、「経営林としても成り立つ森づくり」も追求していきます。木材搬出のための道路の作設などといった基盤整備が整いつつあることから、今後は伐採木の積極的な利活用に注力する予定です。薪利用に留まらず、合板用材、チップ材、原木の市場持ち込みなど、材の特性に応じた多様な販路を検討・展開していきます。



広葉樹・赤松エリアの整備後の様子

他の活動組織への一言

アドバイス

まず、森林整備事業は常に危険が伴う活動であることを、活動開始前に十分に認識しておくことが重要です。その上で、作業者の安全確保を基本とした森林整備のための専門知識と技能を駆使して、万全の体制で作業に臨むことを推奨します。

本交付金を利用してよかった！

本交付金活動では、収益確保の観点から重視される間伐率などの数値目標のみを追求するのではなく、現場の状況に応じた活動計画を柔軟に立てることができました。これにより、私たちは「森づくりとは何か」を深く考え、生物多様性保全などの観点も含めた豊かな森づくりを目指し、基本に忠実で丁寧な作業を行うことへと繋げていくことができました。こうした数値目標と質の高い活動を両立させた実績は、森林整備に課題を抱える方々とこれからの森づくりの進め方を考える機会創出や、新たな組織の創設にもつながっています。

地元自治体と連携した里山林の整備活動

き き きりん
木木木林

設立年：令和元年 構成員：10名

活動地域：群馬県みなかみ町 林種：針葉樹林、広葉樹林

活動実績(令和6年度)：森林資源利用(1.4ha)

交付金 154千円

資源活用内容：間伐材、薪、アロマ製品材料

Email: kikikirin.forestry@gmail.com



活動の概要

活動地は、群馬県北部の赤谷川(あかやがわ)の流域に広がる山深い地域で、後継者不足と高齢化に伴い、40年以上にわたって手つかずとなっている放置森林が多くあります。発足メンバー3人は、親から相続した、子どもの頃に遊んだ山が、景観悪化だけでなく、鳥獣害の要因にもなることを懸念し、なんとかしたいという問題意識をもっていました。こうした中、みなかみ町役場から本交付金について聞き、一念発起し令和元年に活動組織を立ち上げました。

交付金活動としては、主に下刈り、つる切り、除間伐などの森林整備と、間伐材の搬出を行っています。搬出材の多くは薪ストーブ用として薪に加工し構成員が

利用するほか、販売も行っています。また、森林作業の副産物である枝葉がアロマ製品の材料として活用されています。



若い世代・移住者参画で活動に広がり

構成員10名(男性8名、女性2名)のうち6名が移住者、1名が町外者、40代を中心とするメンバー構成です。みなかみ町主催の自伐型林業の研修会で知り合った移住者に声をかけたことで、構成員の拡充につながったほか、ITエンジニアなど異業種の多彩な仲間が加わり、地元(当初)メンバーの森林の見方が大きく変わってきました。地元にいると気づかない、地域資源の価値の再発見につながりました。



森林整備により出た間伐材の一部

活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

▶ 森林資源の活用

森林整備を精力的に進めたことで、対象地 1.4ha で3年間の目標量5m³を大きく上回る合計6.7m³の材(スギ間伐材、広葉樹)を搬出できました。薪ストーブ用の薪は、薪割り機を使って切りそろえ、半年以上乾燥させて自家消費や販売をしています。

また、町内でアロマ蒸留工房を営む構成員の一人が、森林作業の副産物であるスギ、ヒノキ、モミ、アブラチャン、クロモジなどの枝葉をアロマ製品材料として活用しています。工房で蒸留し、採れた精油を用いたアロマ関連製品は道の駅「たくみの里」で販売しています。

▶ 本交付金活動が新たな事業展開へ

構成員の中には、本交付金活動で得た森林整備の技術・経験を活かし、林業や造園業に本格参入した人や、森林資源を活用する事業を立ち上げた人がいるほか、森林インストラクター、アーボリスト、ビオトープ管理士等の資格を取得した人もいます。

また、交付金活動での森林整備の手腕が認められ、地元の人からの依頼で雑木林を整備したところ、別の方から「うちの山も」と声をかけられ、いつの間にか口コミが広がり、たくさんの依頼が舞い込むようになりました。間伐や竹の処理の需要は町内外へと拡大し、少しずつ地域経済の活性化にもつながっています。



精油の蒸留窯とアロマ製品(上)

活動上の課題、その対応策等

- 山仕事はほぼ未経験だったため、必要な林業技術を身に付ける必要がありました。そのため、みなかみ町が主催する「自伐型林業体験研修会」に参加し、チェーンソーの取扱、伐倒・造材・搬出、作業道の開設など、活動に必要な技術を身に付けました。
- 資源利用を積極的に進めているものの、出せる材や搬出先が限られています。また、材を出すこと自体にも資金が必要で、手間や費用に見合った対価を得るのはなかなか難しいと感じています。みなかみ町では、町独自の木材ステーションの整備など、町内産材の積極活用を目指したよりよい仕組みづくりを検討していることから、今後も町と連携して取組を進めていきたいと考えています。



今後の展開

- 本交付金の活用は令和6年度で終了しましたが、林内にはまだ、風倒木、マツ枯れ・ナラ枯れ木、危険木が残っています。せっかく整備した山なのでこれからも継続的に管理していきたいという思いから、当面は本フィールドの整備に引き続き注力していく予定です。
- 本交付金の活動を通じて身に付けたスキルを、個々の構成員がそれぞれの形で生かし、各自の活動につなげていきます。また、会としての活動に必要な原資の確保に向けて、薪販売以外の事業の横展開について町と連携して進めていくことを検討しています。

他の活動組織への一言アドバイス

ボランティア活動という点から、無理をせず参加できるよう活動日を調整すること、参加しやすい雰囲気をつくることは大切なことだと思います。また、地域での活動であることから、地域の自治体との協力関係の構築や連携が、本交付金活動終了後も自立して発展的に活動を継続・横展開する上でとても重要なことだと考えています。

本交付金を利用してよかった！

本交付金により森林整備への想いを形にすることができました。たくさんの移住者が活動に加わったことで、地域資源の潜在的な魅力・可能性にも気づくことができました。本交付金活動で得たスキルを構成員が各自の仕事に生かすことで、結果的に地域経済の活性化にも貢献できたと実感しています。

萌芽更新ができる里山林の再生をめざして

なかい里山研究会

設立年：平成17年 構成員：23名

活動地域：神奈川県中井町 林種：広葉樹林

活動実績(令和6年度)：森林資源利用(1.0ha)、関係人口創出・維持
交付金 160千円

資源活用内容：薪、炭、キノコ原木、木酢液、木工品



活動の概要

活動地のある神奈川県中井町(なかいまち)は、首都圏に位置し、里山の風景が色濃く残り、都市的生活も享受できる「里都(さと)まち」をキャッチフレーズとして掲げる町です。なかい里山研究会は、平成17年、里山資源の保全と利活用を目的に設立されました。本交付金の活動としては、町内2か所(人工更新エリアと萌芽更新エリア)において森林整備に取り組むとともに、関係人口創出・維持を目的に、町外3組織の応援を得て植樹作業を実施しています。

荒廃した里山林の人工更新をめざす

人工更新エリアは、長年にわたり放置されたクヌギ・コナラ林で、4年前はササ、灌木、ツル等に覆われ、大径木化したニセアカシア、ナラ枯れによるものを含む枯損木や倒木等が多く存在していました。令和4年度からの3年間、交付金を使ってササ等を刈払い、倒木と枯損木等を処理し、大径木を伐採し、伐採跡地にはドングリから育てたコナラとクヌギの苗木を植樹しました。今後は、下草刈りつつる切り等の保育作業を行い、萌芽更新できる森を目指します。



新たに萌芽更新にも挑戦

萌芽更新エリアは、もとは大径木化した雑木林で、15年ほど前、森林組合が皆伐した跡地に、前会長が、ドングリから育てた苗木の植栽、下刈り、つる切り、枝打ち等を行い、コナラの美林に再生させました。平均直径が15cm程度に成長したので、令和5年頃から萌芽更新を一部の区画で試したところ、萌芽枝が1年で樹高が2mを超えるほどに成長したのもあり、手ごたえを感じました。令和7年度から交付金を使って全面的な萌芽更新に挑戦します。

活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

伐採木の循環利用の促進と地域連携による活動展開

伐採木は、薪、炭、キノコの原木、木酢液、木工品などとして、利用、販売し、活動継続の財源としています。特に、薪は近隣のパン屋やピザ屋にも活用されています。長年の取組の実績が認められ、中井町が交流人口の拡大や地域経済の活性化を目指す拠点として整備した「なかい里都まち CAFÉ」内に研究会がつくった薪、炭、木工品などを販売するコーナーを設けていただい



す。このほかにも、地元住民、企業、中井町などから、不要木の伐採や処分に関する依頼が増加しています。こうした地域に根ざした活動の展開を通じて、財源確保にも取り組んでいます。

なかい里都まちCAFÉ 外観と、なかい里山研究会の販売コーナー(下)



新たな商品化に向けた作業

構成員に多様な知識や技術を持つメンバーが加わったことで、薪割り機による薪づくりや草刈などの森での作業だけでなく、木を使ったインテリアなどの製作が飛躍的に進み、販売が開始されました。また、草木染の暖簾をはじめ、新たな商品化に向けた試作品づくりも始まりました。



活動上の課題、その対応策等

- 人工更新エリアではイノシシによる掘り起こしなどの獣害が、萌芽更新エリアではシカによる萌芽の採食や皮はぎなどの食害が見られるようになりました。萌芽更新を進める樹木の周りは刈り込みすぎないようにし、一定程度の草丈を保つことで、シカの侵入を防ぎ食害抑制に一定の効果을上げています。
- 新規参加者がいる一方、高齢により脱退する人もいるため、会員数がここ数年横ばいです。現在の構成員の中にも高齢者がいるので、新たな担い手確保への対応が求められています。新規会員の増やし方についてのアドバイスを得たいと考えています。
- 大径木や枯損木の伐倒は極めて危険です。このため、伐倒作業者は安全衛生装備を着用した熟練者に限定し、伐倒箇所は安全に作業できる平坦地に限定しています。



シカの食害から萌芽を保護するため、切株周辺を刈り残した様子(写真右側部分)

今後の展開

- Facebook 等で情報発信し、地域外からの活動参加者の増員を目指します。
- 引き続き、薪、炭、木酢液、キノコ原木等の森林資源の活用に積極的に取り組みます。

他の活動組織への一言アドバイス

大径木や枯損木を伐倒できる熟練者が確保できないときなどは、自力で伐倒するのを避け、林業事業体等のプロの手を借りるようにしてください。苗木を植えるときは、事前に地元産の苗木・ドングリを確保しておくことが、生態系保全、苗木定着率、経済性などの観点からとても大切です。ポットで苗木を育てると根が詰まることがありますが、長さ30cmくらいに切った竹稈をポット代わりに使って育てると、直根が大きく成長し、さらに、植樹する際に竹を割って土に戻すと、根が下に長く伸びて、植栽後の活着率が高くなると思います。

本交付金を利用してよかった！

交付金の採択を受けられたことで、私たちの活動が林野庁から認められた思いがし、誇りに感じるとともに、活動意欲が更に高まり、森づくりの知識習得や安全に対する意識と技能の向上につながったと思います。萌芽更新への挑戦など、今までとは異なる取組にも着手できました。また、町民を対象に植樹作業の参加者を募ったところ、応募が少なくて苦労しましたが、地域協議会のマッチングで地域外から応援団が駆けつけてくれて助かりました。

20年の活動がもたらす里山の再生

さとやまかんきょう NPO法人里山環境プロジェクト・はとやま

設立年：平成17年度 構成員：24名

活動地域：埼玉県鳩山町 林種：広葉樹林(ササを含む)

活動実績(令和6年度)：里山林保全(3.0ha)

交付金 390千円

資源活用内容：薪



活動の概要

埼玉県鳩山町(はとやままち)は、東京都心から約50km圏内にあり、ニュータウンの利便性と里山の自然の豊かさの両方を享受できる町です。しかし、開発を免れた里山も、生活様式の変化などにより手入れが行き届かなくなり、アズマネザサやヒサカキ、倒木等に覆われて景観が非常に悪くなり、歩行も困難な状況となりました。

平成16年に鳩山町が石坂地区の里山林約40haを取得。平成17年に「里山環境プロジェクト・はとやま」が設立され、町からの委託を受けて「石坂の森」の保全維持管理を行ってきました。平成27年からは、交付金の申請を契機に景観と生物多様性の維持回復を目指した本格的な森林整備を進めています。

人を呼び込む地道な里山林回復活動

「石坂の森」を3~5ha程度の区画に分けて、毎年度1区画ずつ整備し、3区画実施したら1年間休止した後に次の3年計画に取り組む等、地道に整備を進めています。休止期間を含め過去11年間で整備した面積は合計で36haに及びます。作業の内容は、コナラの雑木林の低木層に繁茂したヒサカキやアズマネザサ等の刈払い、倒木の処理等です。近年は、メンバーの技能が向上してきたため、散策路や広場に隣接したナラ枯れ被害木のうち、安全が確保できるものについては伐倒できるようになりました。景観が回復したことで、町内外から「石坂の森」の散策に訪れる人が増えるとともに、豊かな自然が移住者の呼び込みにもつながっています。



作業後、除伐枝葉を積上整理した林内



大学や自治体との連携

平成29年に町内にある山村学園短期大学と「里山保全活動に関する協定」を結び、「石坂の森」をフィールドとして、「里山保全体験学習」を実施するなど、生物多様性が豊かな環境を未来に引きつぐための人材育成を行っています。また、平成17年より鳩山町の業務委託を受け、「石坂の森」内の散策路の整備や動植物調査、外来種(アライグマ)の捕獲等を行っています。



活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

➤ 薪配布をきっかけとした若手担い手の確保

伐倒したナラ枯れ被害木は、薪材料にして、町を通じて希望者に配布しています。これをきっかけに薪ストーブユーザーなど若い世代のNPO会員が増加し、担い手の確保につながっています。

「里山保全体験学習」の様子(上)と薪ストーブユーザーへの薪材料の提供(下)

➤ 自然を未来に引きつぐ人材育成と人的交流

里山保全体験学習は、毎年、1年生(50名程度)を対象に伐倒実習と自然観察の2部構成で行っています。また、独自に「石坂の森」内で行っている動植物調査や観察会(年12回程度実施)には、地域外の参加者も増えてきています。



一般市民対象の昆虫観察会(上左)と植物観察会(上右)

活動上の課題、その対応策等

- 希少な野生動植物への獣害対策が課題です。特定外来種のアライグマにより、日本の固有種であるヤマアカガエルやトウキョウサンショウウオの個体数が激減しています。このため、鳩山町と連携し、「石坂の森」だけで年平均20頭ほど駆除するなど、今後も捕獲作業を継続してさらなる被害軽減に取り組みます。
- 現地の景観を彩るコオニユリやヤマユリなどの球根へのイノシシや、草本へのシカの食害が深刻です。地域や現地の害獣生息数低減のため、若手狩猟免許者の確保や箱罠設置などの対策を講じていく必要があります。



水辺の生物調査(上)と活動地に生息するトウキョウサンショウウオ(右)



今後の展開

- 交付金活動終了後も、「石坂の森」を拠点に森林整備と森づくりを継続していく予定です。森林整備と並行して、この森の貴重な自然を地域住民と共有するために、自然観察会などを企画・実施していきます。
- 当活動組織の設立目的は、里山環境の保全・活用を通じたまちづくりへの貢献等です。森づくりや自然観察会を通じた取組への理解醸成に努め、また、インスタグラムや町の広報誌などで地域の里山の魅力を積極的に発信することで、「森づくり」から「人づくり」、「地域づくり」へと活動の輪を広げていきます。



他の活動組織への一言アドバイス

令和5年度にアドバイザー制度を活用して、チェーンソーのメンテナンスやナラ枯れ被害木の牽引伐倒の講習を行いました。大好評につき、翌年度も同制度を活用してフォローアップ講習を行い、作業の実務能力向上と安全確保への自信を深めました。ただし、著しい偏心木や急傾斜地の危険木等の困難木は、町に報告して、専門の業者に伐倒してもらうように依頼しています。講習によって自力で伐倒できるかどうかの判断力も向上したと思います。アドバイザー制度は、積極的に活用することをお勧めします。

本交付金を利用してよかった！

交付金を利用したことによって、活動実績や森の状況を写真や文章にして報告する習慣が身につく、町からの信頼が高まりました。森づくりは、長いスパンで考えるべき活動です。組織内での信頼関係を構築し、活動の目的や意義を深く理解するためには長い時間が必要です。交付金の活動を11年間続けてきたことにより、メンバー間の信頼関係が促され、長年の活動の成果を確認しながら作業できるようになったことが活動への積極的な参画へとつながっています。こうした「時間の確保」を可能にする点で交付金は、非常に大きな役割を果たしてくれています。

森林資源の活用で地域経済の好循環の実現へ

木の駅上石津実行委員会

設立年：平成23年 構成員：28名
 活動地域：岐阜県大垣市 林種：針葉樹林
 活動実績(令和6年度)：森林資源利用(5.1ha)
 交付金 561千円
 資源活用内容：薪、チップ用材
 Email: sakaguchi-t@ogaki-tv.ne.jp



活動の概要

岐阜県大垣(おおがき)市上石津地区は、三重県・滋賀県と隣接する地域で、鈴鹿(すずか)山脈と養老(ようろう)山地などに囲まれた盆地型の里山であり、地区の約85%を山林が占めています。少子高齢化の進展等による森林の荒廃が進んだことから、平成23年に地域有志で「木の駅上石津実行委員会」を設立し、「木の駅プロジェクト」のスキームを基にした森林整備を行っています。「木の駅プロジェクト」は、全国約90か所で実践されている森林整備と地域活性化を両立させる取組で、各地域に設置されている「木の駅」に間伐材などを出荷すると、地元の登録店舗で使用することができる「里山券(地域通貨)」と交換することができます。木の駅上石津実行委員会は、平成25年度より本交付金を活用して、スギ・ヒノキ人工林の間伐を進め、伐採木を主に薪として利用しています。



木の駅上石津実行委員会の「木の駅プロジェクト」体系図



石窯の中で燃える薪(上)と里山券

森林資源の安定的な活用

薪は、木の駅を経由して、大垣市上石津地域事務所、石窯ピザ店(市内2店舗)、キャンプ場(三重県いなべ市)などに納入しています。特に、平成30年に大垣市上石津地域事務所庁舎に木質バイオマスボイラーが導入されたことで、安定的に薪を納入することが可能となり、安定した森林資源の活用が実現しました。

地域通貨「里山券」で地域経済への貢献

薪等と交換された「里山券」は、地域内の15の登録店舗(小売業店、理髪店、ガソリンスタンド、飲食店など)で使用できます。活動参加者にこの「里山券」を還元することで、本交付金活動のモチベーションの向上に繋がる他、モノとお金の循環による地域経済の好循環に寄与しています。

活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

▶ 間伐目標の達成と地域内への薪の供給

年1割を目標に間伐し、間伐材の薪利用などを進めています。令和6年度の伐採量は合計48.28m³となり、令和4年度からの3年間の目標である3年間で3割間伐を達成することができました。約50m³の間伐材は、薪などとして、主に上石津地域事務所の木質バイオマスボイラーのほか、近隣のピザ店とキャンプ場に供給しています。一部は個人の薪利用者に提供し、残りはチップ用材としています。



➤ 「木の駅プロジェクト」による森林整備と地域活性化

「木の駅プロジェクト」は、これまで山に関心がなかった山主が、自身の山の森林資源が地域経済の好循環に寄与すると気づくことで、自身の山と向き合うきっかけを提供しています。こうしたことが、山主が森林管理を自ら進めたり、森林組合や素材生産業者に依頼したりするなどにつながり、地域の森林整備促進の後押しとなっています。

活動上の課題、その対応策等

- 安定した材の販売先(出口)を確保することが課題でした。販売先を模索する中、大垣市上石津地域事務所庁舎のボイラー用に、薪を納入できるようになり、課題が解消されました。
- 「里山券」の利用が、ガソリンスタンドなど一部店舗に偏る傾向があります。このプロジェクトの趣旨が正しく理解され、地域全体で盛り上げていくためには、「里山券」を登録店舗でバランスよく利用される必要があります。そのために、会員の方に対して利用できる店舗を紹介するなど、PRを積極的に行っています。

大垣市上石津地域事務所庁舎に導入された木質バイオマスボイラー(右)



今後の展開

- 整備が行き届いていない森林の間伐等を継続して実施していきます。搬出量については、現状レベルで無理なく継続することを重視しています。
- 設立当初からの中核メンバーが高齢化し重労働が困難になってきました。当面は役割分担を見直し、40、50代の構成員に伐採作業を主だってやってもらい、高齢者には搬出や薪割りなどの比較的単純な作業をしてもらうことで、対処していこうと考えています。

他の活動組織への一言アドバイス

放置された山林の整備を持続的に行うためには、材の利用方法を活動前に考えておくことが大切です。山から近いところに搬出先があるということが長期的に見て重要なことかもしれません。また、温泉施設など薪の安定的な搬出先が見つければ、ペレットなどより薪の方が取り組みやすいと思います。

本交付金を利用してよかった！

若者たちが町を離れていき、地域の高齢化が進む一方、高齢者の働き口が十分でないという状況があります。そうした中で、本交付金の活動をきっかけに、地域の高齢者が活躍できる機会や場が生まれ、それが地域活性化の一翼を担うことにもつながっています。



木の駅の様子

マウンテンバイクを核とした里山林整備

はぎ だいさとやま ほ ぜん かい
萩の台里山保全の会

設立年：令和5年度 構成員：3名

活動地域：奈良県生駒市 林種：広葉樹林、竹林

活動実績(令和6年度)：里山林保全(2.1ha)

交付金 242千円

資源活用内容：薪、チップ、クラフト用品(ツル)

Email: mb28tf35ml@kcn.jp



活動の概要

生駒(いこま)市は、奈良県北西端に位置し、西に生駒山地、東に矢田(やた)丘陵と西ノ京(にしのかよ)丘陵が連なっています。活動地のある乙田(おとだ)地区には複数の背後斜面があり、雑木林や竹林となっていますが、所有者の高齢化などの影響もあり、集落で代々守り続けている「乙田の森」などの荒廃が目立ち始めていました。そこで、令和5年、活動組織の代表が「萩の台里山保全の会」を設立し、本交付金を活用して、乙田地区の森を整備していくこととしました。活動対象地(2.1ha)は、活動組織の構成員を含む複数の所有者により登記された共有林で、父親の代から50年以上にわたりほとんど管理されていない里山林です。生まれ育った里山の原風景を取り戻し、また、自分たちの趣味でもあるマウンテンバイクを愛好者たちが楽しめる場所にしたいという考えの下、間伐やツル切りなどの森林整備を行い、森の景観の改善と生物多様性の保全に取り組んでいます。



森林整備を支援してくれるMTB共生の会の皆さん

マウンテンバイク仲間による協力

森林整備活動には、知人のマウンテンバイク愛好家団体「矢田丘陵MTB共生の会」(県内外170名が会員登録)に協力をいただいています。この会は、県立矢田自然公園内のマウンテンバイク道を利用するだけでなく、森林整備やハイカーなどの安全確保にも積極的に取り組んでいます。同公園内での整備ボランティア活動に参加したことをきっかけに同会との交流が始まり、本交付金活動地での森林整備への支援もしていただけることになりました。



整備された林内の散策道

森林整備への理解を促すため

萩の台里山保全の会は、マウンテンバイクが森林整備への理解や支援・協力を得るためのきっかけになると考えています。そして将来的には、地域の皆さんの理解を得ながら、整備した山を地域と共に育てて、マウンテンバイクのフィールドとして段階的に開放していく計画です。これにより、矢田丘陵MTB共生の会関係者をはじめとする地域内外の人々を乙田地区に呼び込み、地域の方々と一緒に新たな里山の価値をつくり出し、地域活性化につなげたいと考えています。現在は、専門家の意見を取り入れながら、地域の声を大切にしつつ、散策道を兼ねた、安全で魅力あるマウンテンバイクコースの整備を目指して、森林整備活動に取り組んでいます。

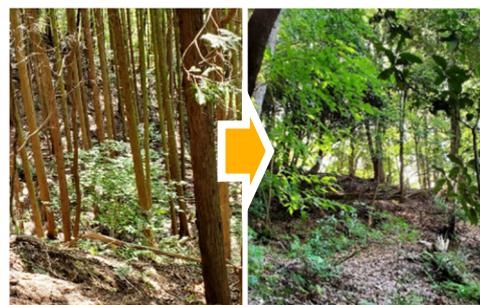
活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

▶ 林内の景観改善と生物多様性の保全

活動初年度の令和5年度は、全体の25%(0.5ha)において、弱度の除伐・間伐を実施し、令和6年度には残り約1.5haにおいて、中程度の間伐を実施しました。薄暗く景観的にも悪い状態だった森に光が入り、林床環境が改善したことで多様な下層植物が見られるようになりました。

▶ ほぼ100%の搬出材活用

除伐・間伐などの森林整備で搬出した材は、ストーブ用の薪、ベンチやクラフトなどの材料としているほか、一部をチップにしマウンテンバイクのコースの補修材として、ほぼ100%活用しています。また、林内でとれたツルなどの素材についても活用を検討した結果、クラフト用品として商品化することができ、継続的に制作・販売しています。



間伐材やツルなどを利用したクラフトや家具

活動上の課題、その対応策等

- 地域に人を呼び込むことを念頭に、里山の原風景を取り戻しながらマウンテンバイクのフィールドとして森林の整備を継続していくには、地域内外の人々の協力が不可欠ですが、地元の人々とのつながりに不安を感じています。このため、SNS等での活動実績の発信に力を入れるとともに、新たな地元人材の確保に取り組みます。
- 活動地内では、イノシシの掘り起こしによるコースの破損などの影響が見られ、獣害の拡大が懸念されます。また、活動地周辺では、放置森林だけでなく、耕作放棄地も目立ちます。こうした状況に対し、森林整備やマウンテンバイクで森林に人が入ることで、イノシシ侵入の抑止につながることを期待しています。

今後の展開

- 生物多様性の視点などにも配慮し、質の高い針広混交林になるよう整備を継続していきます。また、そうした活動に対する生駒市の理解と協力が得られるよう、より積極的にアプローチして、具体的な連携方法なども検討していきます。
- 大阪や京都といった大都市からも近いというロケーションを活かし、企業のCSR活動地や、環境教育の場としての活用にも力を入れていきます。

他の活動組織への一言アドバイス

「マウンテンバイク」というキーワードは、森林整備に関わる関係主体との新たな連携(横のつながり)を生み出しました。このように、一見すると森林整備と直接関連しないキーワードや活動であっても、森林整備の課題解決や活動の多様な展開につながる可能性を秘めています。

本交付金を利用してよかった！

本交付金を使って森林を整備し、それをマウンテンバイクのフィールドとして活用することで、小学生から大学生まで若い世代が山に関わるようになり、里山が「守る場所」から「人と人とのつながりが育つ場所」へと変わってきています。



里山林の再生が育む地域のにぎわい

NPO法人グリーンバレー

設立年：平成16年 構成員：31名

活動地域：徳島県神山町 林種：針葉樹林、広葉樹林、竹林

活動実績(令和6年度)：里山林保全(2.0ha)、竹林整備(0.3ha)

交付金 310千円

資源活用内容：間伐材

Email: greenvalley@in-kamiyama.jp



活動の概要

徳島県中央部に位置する神山町(かみやまちょう)は、町域の約86%を森林(ブナ、モミ、ツガ、などの自然植生とスギ・ヒノキの人工林)が占めています。かつては林業で栄えたこの町も、時代の変化とともに産業が衰退し人口流出が加速しました。平成11年、地元有志により、町に滞在し創作活動を行うアーティストを国内外



から招く「アーティスト・イン・レジデンス」の活動が立ち上がり、平成16年にNPO法人グリーンバレーが設立されると、アートや生活スタイルと、豊かな自然をはじめとする地域の森林資源とを融合することで新たな価値を創出し、地域活性化を目指す取組が進められました。平成17年からは、町内の大栗山(おおあわやま)周辺の森林整備を開始し、地域の活性化に取り組むのに合わせて、地域の方や若者に参加を呼びかけ、森林の知識や技術を伝える活動を行っています。令和5年から開始した本交付金活動では、放置された里山林と竹林の除伐・間伐、伐採木・伐採竹の処理などを行い、里山林と竹林の景観改善を図るとともに、生物多様性豊かな広葉樹の森づくりにも励んでいます。

アートと自然の融合が新しい里山の価値に

大栗山(標高250m)には、町有の散策路「創造の森 アートウォーク(約1時間コース)」があり、グリーンバレーが散策路と周辺の山林を整備しています。アートと自然を融合した森林空間を整備することで里山に新たな価値を創



整備した山林と
アート作品のある散策路



出し、こうした魅力の創出が地域内外の関心を高め、新たな担い手の確保につながることを期待し、森林整備に取り組んでいます。

学生向けの森づくりを学ぶ機会の提供

活動に参加する若者を増やすために、学生に森づくりを学ぶ機会を提供しています。「城西高校神山校」や「神山まるごと高等専門学校」の生徒向けに実施した「森づくり安全講習会」では、座学とチェーンソーを使った伐採木の丸太切り実践などを行い、合わせて15名が参加しました。



活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

▶ 見通しの倍増と密度の半減

2.0haの森林を対象に獣害のない見通しのよい森づくりを行い、活動初年度の令和5年度は10m程度だった見通しが、令和6年度には目標の20mまでになりました。また、0.3haの竹林を対象にタケノコが採れる環境を目指し間伐を行い、令和5年度は5,200本/haだった竹の本数が、令和6年度には2,500本/haまで減らすことができました。



活動地内でのイベントや散策を楽しむ人々の様子

▶ 森林改善で森のにぎわい

活動地の森林は、整備前とは比較にならないほど改善され、安心して散策を楽しめる環境になりました。大栗山の入込数の正確な把握はできませんが、活動地である「創造の森 アートウォーク」には、地域内外・老若男女問わずたくさんの方が訪れるようになりました。



活動上の課題、その対応策等

- 活動資金確保の観点から森林資源の持続的活用が課題です。令和6年度は、森林組合に針葉樹材を出荷しましたが、売り上げから、造材・搬出のコストや山主への還元分などを差し引くと、手元にはほとんど残らないのが現状です。コストを下げ、付加価値を上げる対策を検討しています。
- 構成員が高齢化しており、新たな人材確保が必要です。高校生向けに実施した講習会等をきっかけに、若い人材に継続して活動に参加してもらうための有効な方法などを模索中です。

今後の展開

- 地元の「城西高校神山校」に「森林女子部」があり、地元産の木で作ったキーホルダーや薪を道の駅で販売する活動を行っています。今後はこうした地元の高校との連携なども模索し、活動を活性化していきたいと考えています。
- 搬出等のコストを下げる方策を模索しつつ、収益率アップを目指していきます。また、道の駅との連携に向けた販売物の検討なども継続して行う予定です。

他の活動組織への一言アドバイス

できることから少しずつ始めていくことは、未経験者が森林整備に取り組み、それを継続するための重要な要素です。焦って作業を進めるより、どういう山にしたいか、地域のあり方などを仲間とゆっくり話し合い、考える時間をもつことも大切だと思います。

本交付金を利用してよかった！

活動開始当初は何も道具がなく、できることが限られていました。本交付金を使って道具をそろえられたのはとても大きかったです。道具があることで、道具を安全かつ適切に使う技術や知識が身につけられ、構成員の士気も向上し、その後の持続的な活動につながりました。



自治会主導の竹林整備(地域の憩いの場の創出)

たくまひがしこうく ちょうないじ ちかいかんきょうほぜん
託麻東校区7町内自治会環境保全

設立年: 令和4年度 構成員: 26名

活動地域: 熊本県熊本市 林種: 竹林

活動実績(令和6年度): 竹林整備(1.17ha)

交付金 287千円

資源活用内容: タケノコ、竹チップ、植木鉢

連絡先: 090-8837-9690



活動の概要

活動地は、熊本市東部の戸島山(としまやま)東側山麓に位置しています。新興住宅地の中に残された山林でしたが、地権者の高齢化や生活様式の変化に伴い手入れが行き届かなくなり、モウソウチクが侵入したことにより、人の立ち入りも困難な竹林へと変化しました。竹林に沿った道は通学路として利用されているため、防犯とごみの不法投棄を防ぎ、戸島山を市民の憩いの場・体力づくりの場として楽しんでもらうために、本交付金を活用して竹林整備を行うこととしました。託麻東校区7町内自治会環境保全是、自治会内の組織として令和4年に設立されました。26人の構成員は全員地域在住です。活動地での作業は主に竹林整備で、竹が覆いかぶさるように生えた暗い道路沿いは植栽エリアと

して竹を全伐し、四季折々の景色を楽しんでもらうためツツジ、アジサイ、モミジなどを植栽しました。間引きエリアでは、竹を間引いてタケノコが収穫できるように維持管理しています。また、戸島山の展望所に続く活動地に隣接する遊歩道も利用者のために整備しています。



竹を全伐しアジサイ・モミジ・ツツジを植栽したエリア

自治会主導の地域のための活動

自治会内組織として行っている取組であるため、地域の人々の活動への理解と協力が得られるよう工夫をしています。その一環で、回覧板などで活動の様子や花の開花情報などをこまめに周知しています。遊歩道などの利用者も竹林や花の様子などを積極的に発信して後押ししてくださっています。



粉碎した散布用のチップ



顔を出したタケノコ

自治体の支援も有効に活用

熊本市が実施する「放置竹林有効利用推進事業」を活用し、竹粉碎機を借用しています。粉碎機を使って竹をチップ化し、林内に散布することで地温が上昇し、早出しタケノコの生産が可能となりました。

活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

➤ 数値目標達成で計画どおりの環境改善

活動地では竹の本数が3,000本/haとなり、本交付金活動の数値目標を100%達成しました。タケノコの生育環境が整った箇所は、地域住民が自由にタケノコを収穫できる場所としています。侵入竹の除去が完了した箇所



は、苗木の植栽を進め、四季折々の花や木が楽しめる場所に転向しています。加えて、活動地に隣接する戸島山の遊歩道沿いの管理も行うなど、活動前の計画どおりの環境改善ができました。

▶ 戸島山の散策者が増加

戸島山では、遊歩道からの竹林の見通しがよくなるなど景観が改善された結果、散策者が増加しています。また、地域外の中学校の部活動のトレーニングの場としても活用されるようになりました。活動地が新興住宅地に近接し、住民の関心も高まっていることから、地域の若い世代が活動に参画することが期待されています。



管理により明るくなった遊歩道(上)
竹の全伐後植栽したアジサイ(下)

活動上の課題、その対応策等

- 活動地は住宅地に隣接し、通学路としても利用されている道路に面しています。道路脇を覆うように生えた竹が伐採しても次々と出てくるのが課題でした。3年間の根気強い除去作業で、全伐エリアの竹の勢いは収まりました。そこにアジサイ、モミジ、ツツジなどの木を植栽地域の方々に楽しんでもらっています。タケノコの収穫期に竹林を開放し自由に採取してもらうことも竹の発生を効果的に抑制しています。
- 構成員の高齢化による作業負担の増大が課題の一つです。特に、気温が上昇する時期の作業は大きな負担となります。戸島山は複数の自治会が管理していることから、今後は自治会で協力し合い、人員を互いに補いながら整備を継続していきたいと考えています。



今後の展開

- 竹の間引きや新たに生えてくるタケノコを収穫するなどして、再び荒廃しないよう現在の良好な状態を維持するとともに、引き続き竹林全伐箇所に様々な木や花を植栽し、地域の方が楽しめる憩いの場にしていきます。
- 令和7年11月に熊本市主催の「くまもと花博」が市内各所で開催され、市の依頼でイベント用に本活動地で伐採した径の太い竹を植木鉢として約50個分を提供しました。伐採した竹を有効利用するために、今後もこうした依頼に積極的に対応していきたいと考えています。



他の活動組織への一言アドバイス

荒廃した状態に戻らないよう、継続的な管理のための具体的な計画を立てることが重要です。道路に面した竹の全伐エリアでは苗木を植栽し、間引きエリアでは自由にタケノコが採取できるようにしました。このように地域住民に竹林を利用してもらう環境を整えることは、一時的な整備に終わらせず、継続的な活動のための体制づくりにつながるため、重要であると考えます。

本交付金を利用してよかった！

整備前は、モウソウチクが繁茂し人の立ち入りが困難で、道路に面しているため不法投棄も多発していました。本交付金活動で本格的な竹林整備の作業ができたことで、不法投棄は一掃され、学校の生徒も安心して通れるようになり、遊歩道の利用者も増え、地域への貢献を実感しています。

自治会主導の竹林整備(集約化と一体管理による竹林の再生)

むすぶさとやまほぜんかつどうそしき
結里山保全活動組織

設立年: 令和4年度 構成員: 29名
活動地域: 熊本県熊本市 林種: 竹林
活動実績(令和6年度): 竹林整備(3.33ha)
交付金 816千円
資源活用内容: カキ筏(竹材)、動物の餌(ササの葉)
堆肥(竹チップ)、メンマ
Email: mm4s-ysd@asahi-net.or.jp



活動の概要

活動地は、熊本市と山鹿(やまが)市の境界に位置し、特産品のスイカやメロンの生産など、ハウス栽培を中心とする農村地域にあります。地区内の山林は、一筆ごとの面積が狭い不在村者所有の森林を多く含むなどのことから、管理が行き届かず放置され、荒れた状態でした。その結果、竹林が日光を遮断し作物の生育を妨げるなど周辺農地への悪影響が生じ、農地ではイノシシやカラスなどによる鳥獣被害も深刻でした。そこで、自治会が結里山保全活動組織を立ち上げ、本交付金活動を開始しました。目的は、竹林整備を通じた「所有者によ

る山の管理」、「タケノコの生産」、「日照被害の軽減」、「鳥獣被害の減少」、「自治会の枠を超えた人間関係の構築」、「山に親しむきっかけづくり」です。活動に先立ち、約半年かけて、県外にも散らばる総計55筆の所有者を探し、整備することへの同意を求めました。具体的な作業として、作業道の整備、枯竹や折れ竹の除去など密集竹林の間引き・除伐と竹材の活用を行っています。



市から借り受けた竹粉碎機

竹のまるごと活用

一定要件を満たす竹材はカキ筏用に出荷するほか、チップ化し近隣農地の堆肥として活用しています。竹粉碎機は、熊本市の「放置竹林有効利用推進事業」の一環で、オペレーター付きで借りられるため安心です。収穫した穂先タケノコは缶詰用に出荷し、ササは市の動植物園のレッサーパンダの餌として月に1回提供しています。

細分化された山林を面的に集約し、一体的に管理

市の地籍調査の結果、境界や所有者などを登記簿で確認できるようになり、所有者探索を円滑に開始することができました。一方で、山林放置の要因のひとつとして、活動地では一筆あたりの面積が細分化されており、所有者が高齢化し、地域を離れた不在地主も多く、個々の所有者が個別に管理するには非効率で困難であることが課題として残っていたため、複数の所有者の山林を面的に集約し一体的に管理することで、この問題に対応することとしました。

活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

➤ 竹林整備が作物生産と鳥獣被害に貢献

竹を適切な密度に維持しタケノコが収穫できる竹林を目標に間引き作業を行いました。令和4～6年度の3年間で、数値目標の4,000本/haにすることができました。令和6年度に個々人で収穫し、缶詰用として農協に出荷した穂先タケ



ノコは、約150kgにのぼりました。また、竹林整備により、周辺農地の日照被害が軽減され作物生産が増大するとともに、獅子罾の設置によるイノシシの捕獲と合わせて農地で多発していた鳥獣被害を大幅に減少でき、近隣農家から感謝されています。

➤ 継続的な活動で里山の存在意義が回復

継続的な活動で、所有者さえ不明となり見向きもされなくなった里山の存在意義が回復し始めています。かつてそこで遊んだ高齢者だけでなく、多くの人々にとって親しみの持てる場所になりつつあります。



出荷用の穂先タケノコ(上)
レッサーパンダの餌用のササ(右上)

活動上の課題、その対応策等

- 森林整備に関心のない山林所有者や地域住民をいかに巻き込むかが課題です。農家の担い手や定年退職者、地域外の地縁者の協力で活動を維持しています。粘り強い取組を続ける中で、所有者や地域住民の意識も少しずつ変化し始めています。
- タケノコが採れる環境に整備した竹林でも、不在地主をはじめ、自らタケノコ採取をすることに消極的な所有者がいます。竹林はタケノコを採取しないと再び荒廃してしまいます。苦労話を各地でする中で、レクリエーションを兼ねてタケノコ堀りをしたいという申し出が市内の数団体から来るようになり、所有者の了承を得た上で受け入れています。このように、地域を超えた人々が親しむ場所になりつつあります。



今後の展開

- 継続的な活動に向けて活動基盤を強化するために収益を上げる努力を続けるとともに、親しみを持てる里山を維持しながら環境保全やレクリエーションの場の創出に向けた管理を行います。整備後の土地の管理は、各所有者が行うことを原則とし、その上で、不在村所有者等より管理の依頼があれば、可能な範囲で対応していきます。
- 構成員の高齢化が進む中、広範な活動地での作業を継続するためには新規構成員を確保する必要があります。このため、都市住民への里山体験の提供や、地域の現状・活動内容を発信し、若い世代の活動への参加を促します。自分たちが目指す理想的な山林にするためにさらに整備を進めます。



他の活動組織への一言アドバイス

活動開始時に構成員を少なくとも5~6名程度を揃えておくと、相互に協力し補完し合えて、より計画的かつ余裕を持った作業が可能になります。また、作業に対する人件費を支払う仕組みを導入すると、地域外の人々にも作業の手伝いを気兼ねなく依頼でき、その結果、地域外の活動協力者の増加につながります。

本交付金を利用してよかった！

多少の苦労はあったものの交付金活動を継続することで山林の様子が改善され、以前は山に関心がなかった地域の人々に喜んでいただけるようになったことは大きな成果です。また、共同作業を重ねるごとに会員同士の交流が深まり、相互の信頼関係が強化されました。地域を巻き込みイノシシの供養を兼ねたバーベキューの会を開いたり、レッサーパンダの餌が話題になったりと、辛い作業ながらそれなりに楽しく進めています。

自治会主導の竹林整備(タケノコの安定生産、伝統文化の保全)

たばちくりんほぜんたい
田畑竹林保全隊

設立年: 令和元年 構成員: 30名

活動地域: 熊本県熊本市 林種: 竹林

活動実績(令和6年度): 森林資源利用(1.0ha)

交付金 110千円

資源活用内容: タケノコ、竹チップ、メンマ、竹あかり、竹箸

Email: yuudachi51391@gmail.com



活動の概要

活動地は、熊本市北部に位置し、農地の中に集落が点在し、その間に竹林が広がる地域です。この地域の里山は、昭和33年頃までは薪炭林として利用されていましたが、エネルギー革命の浸透で薪炭林の利用が急激に減少し、竹材やタケノコなど、薪炭以外の新たな現金収入を得る目的



で、モウソウチクの植栽が進みました。しかし、その後、安価な外国産竹材の輸入やプラスチック製品の増加などにより、竹の利用が著しく低下したため放置竹林が拡大しました。荒廃した竹林内は不法投棄が増え、見た目の悪い景観となっていました。このため、令和元年に田畑地区の自治会が中心となり、自治会長を筆頭に「田畑竹林保全隊」を設立し、地域の人々が気軽に竹林に入り、タケノコ掘りを楽しめる環境を再生する活動を開始しました。本交付金活動2期目の令和4~6年度は、安定したタケノコの生産を目指して、竹の間伐、枯れ竹・折れ竹の除去や下草刈りを行い、資源利用として、タケノコの出荷、竹チップの活用などを行いました。

荒廃竹林整備による地域環境改善と資源活用

地域住民が収穫したタケノコは、自家消費分を除き、地元の山田青果卸売市場や植木青果市場へ、年間約800kg~1t出荷しています。伐採した竹は、熊本市の「放置竹林有効利用推進事業」を通じて借り受けた竹粉碎機でチップ化して林内に散布しています。このほか、メンマの試作、竹あかり・竹箸の制作など、多様な形での資源活用に取り組んでいます。



竹林内に散布された竹チップ(左)、竹あかり(中)、竹箸と竹の瓶(右)



竹林内の祠「天神さん」(左)と火祭り「どんどや」の様子(右)

地域文化の保全と地域活動の活性化

通称「天神さん」として親しまれている竹林には祠があり、この祠の前で、毎年冬に無病息災や五穀豊穡を祈る「どんどや」という伝統的な火祭りが行われています。明治時代から引き継がれてきた祭事の神聖な場所を整備することで、伝統文化の保全と地域活動の活発化にもつなげています。

活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

▶ 間伐目標達成でタケノコが採れる環境に

タケノコの生産が行える竹林を目指し、竹の間伐、古い竹の除去や下草刈りなどを行い、令和4～6年度の3年間で、目標以上の2,400本/haにすることができました。本交付金活動により、林内へ入るのが困難だった竹林が、気軽に入ってタケノコが採取できる景観のよい環境に改善したほか、タケノコの安定的な収穫が可能になり、地域住民から大変喜ばれています。



▶ 作業の糧となる地域の人々の感謝や関心

「どんどや」の日には、「竹林がきれいになった」、「竹林が怖くなくなった」、「時々訪れるようになった」など、竹林整備の成果を歓迎する多くの声をいただきます。また、他地区の竹林所有者も本交付金活動に関心をもってくれるようになりました。

活動上の課題、その対応策等

- チェーンソー使用開始当初は、複数の組に分かれて竹の伐倒作業を進めたため、互いの状況を把握しきれず、伐倒作業中に、別の者が切った竹が近くに倒れてくるなど、ヒヤリとする事態が生じたことがありました。そこで、作業開始前に一連の手順を全員で共有し、組分けせずに作業をするよう改善しました。その結果、作業の安全性を確実に確保できるようになりました。
- 伐採竹をチップ化するには、伐採した竹を作業道の脇まで運搬する必要があります。斜面での伐採作業の際には、この斜面上の運搬が大変でした。そこで、伐採した竹を保管場所へ運ぶ作業を一人一人が上下移動するのではなく、リレー方式に変更したことで、作業効率を上げることができました。

今後の展開

- 整備作業により管理の行き届いた竹林となったことで、竹林所有者は作業がしやすくなり、タケノコ生産に注力できるようになりました。整備が完了した竹林は、それぞれの所有者が自ら管理を継続することが原則です。ただし、必要に応じて田畑竹林保全隊が支援することとしています。
- 本交付金活動は終了したため、田畑竹林保全隊としての活動は一区切りとし、今後は竹林所有者と自治会員ができる範囲で協力し合い、地域内外の多くの人々が散歩道として利用できる竹林を目指して作業を継続していきます。



祠へと続く林内の散策路

他の活動組織への一言アドバイス

整備開始前に、同様の現場での整備経験が豊富な方に現地を視察していただき、作業の進め方など実践的な指導を受けることができれば、より効率的な作業が可能になると考えます。また、作業を実施する際には、作業前・作業中・作業後の写真を多めに撮影しておくことを推奨します。

本交付金を利用してよかった！

活動地の竹林内にある祠の前で、地域の伝統行事「どんどや」の祭事が行われます。この神聖な場所をきれいに整備したことで地域の人々にとっても喜んでいただけたことは、大きな喜びであり、本交付金活動の大きな意義を感じています。

企業と連携した里山林整備

もりほぜんかい イノホイの森保全会

設立年：令和5年度 構成員：11名

活動地域：宮崎県国富町 林種：広葉樹林、竹林

活動実績(令和6年度)：里山林保全(0.2ha)、竹林整備(0.3ha)、
関係人口創出・維持、交付金 145千円

資源活用内容：原木シイタケ、木工芸品(郷土玩具うずら車、オカリナ)
ニホンミツバチの巣箱、イベント用資材

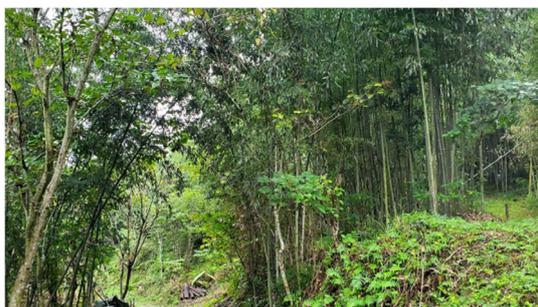
Email: matchan77@ezweb.ne.jp



活動の概要

宮崎県の県央部に位置する国富町(くにとみちょう)は町の面積の6割を森林が占める農山村で、江戸時代には本庄川(ほんじょうがわ)の水運によりにぎわったほか、国指定史跡の本庄古墳群や、平安時代の歌人、和泉式部とゆかりのある法華嶽薬師寺があるなど、自然の中に歴史と文化が息づく町です。活動対象地の森林は農地に面した里山林で、所有者の高齢化等により長年未整備となっており、内部に竹が侵入して見通しが悪い状況にありました。イノシシやシカによる近隣農地での獣害の発生や、通学路に面していることから地域の子どもの安全への影響も懸念されたため、地域にかかわる人々が有志で近隣の里山林整備の取り

組みを開始しました。本交付金による活動は令和5年度から始め、下草刈り、灌木や竹の除伐、苗木植栽等の整備に加え、森林資源を活用し、地域内外の人々向けの体験型イベントや県内企業との連携、伝統文化の継承に取り組んでいます。



幅広い体験型イベントにより地域内外から人を呼び込む

本交付金の「関係人口創出維持タイプ」を活用し、地域外の方に竹林整備に参加してもらっています。参加いただいた方には、交付金の活動以外にも、竹細工の工作体験を組み合わせたオカリナ作り、整備した森で得られた草木を利用した叩き染め、ニホンミツバチの巣箱作りやシイタケの駒打ち、木の色鉛筆作り、カブトムシ捕獲など、里山の自然を使った幅広い体験型イベントを楽しんでもらっています。



地域外の方々向けイベント(左から)、竹のオカリナ作り、草木の叩き染め、ニホンミツバチの巣箱作り、シイタケの駒打ち

ネーミングライツ・獣害対策で企業と連携

鳥獣被害対策用ECサイト「イノホイ」を運営する株式会社 refactory のCSR活動として、令和5年から、同社に活動地のネーミングライツスポンサーになっていただいています。ネーミングライツ料により継続的な森林整備活動

ができるようになります。活動森林内では、獣害対策と当社で取り扱う製品の効果検証を兼ねて、イノシシ用の箱罠を設置しています。

里山林整備がつなぐ地域の伝統文化

「法華嶽(ほけだけ)うずら車」は、1200年前から町に伝わる郷土玩具で、地域に生育するイヌタラ(カラスザンショウ)が主な素材です。唯一残っていた製作者が引退すると知り、活動組織の代表が「法華嶽うずら車保存会」を発足。活動森林で伐採したイヌタラを活用し、自ら製作者から技術を学び、郷土に受け継がれてきた文化の継承にも努めています。



イノシシ用箱罠(上)
法華嶽うずら車(下)と
その材料イヌタラ(カ
ラスザンショウ)(右)

活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

▶ 鳥獣被害の周知と狩猟人材の育成

活動森林は、罠メーカー「イノホイ」株式会社 refactoryとの連携を通じて、鳥獣被害への理解促進と狩猟の担い手育成を目的に、初心者や狩猟免許保有者に罠や捕獲技術の指導を行っています。

▶ 活動地外でのイベント開催の要望増加

活動森林での体験型イベントは、一般向けの整備作業を年3、4回、子ども向けの自然体験を年2、3回実施しています。特に自然体験イベントは、子どもたちだけではなく、あまり里山に馴染みのない若い親世代にも好評で、活動地外でも出張イベントを開催してほしい、という要望が増えてきました。



活動上の課題、その対応策等

効率的に森林整備作業を進めることが課題です。このためには動力機械が必要で、本交付金でも資機材等を購入する際に支援を受けることはできませんが、相応の自己負担が必要となり困難な面があります。現在は基本的に手工具で行っていますが、より効率的に作業を進めるため、必要な機材のレンタルやリースを今後検討していく予定です。

今後の展開

- 引き続き、森林の整備に加え、里山林の新たな活用に向け企画を練っていきます。森林に直接ふれる機会をつくることで、子どもたちが森に関心をもち、実際に足を運びきっかけをつくりたいと考えています。
- 子どもから大人まで楽しめる森づくりや自然体験型イベントを継続して実施する方針です。「イノホイの森」での体験が、全ての世代にとって森の保全活動の意義を考えるきっかけとなることを目指しています。

他の活動組織への一言アドバイス

活動に着手する際、単に森林整備を行うことだけを目的化せず、森林を取り巻く課題やその要因を整理し、自分たちに何ができるかを深く考えることで、解決に向けたアイデアは無限に生まれてきます。一つの課題を解決する度に喜んでくれる人がいます。森の資源を大切に思う気持ちこそが、最も重要なことだと考えます。



本交付金を利用してよかった！

交付金活動を通じて、ネーミングライツをはじめとする企業との連携体制が構築できました。また、森林整備に関わる多様な主体との交流機会が増え、活動のよい刺激になっています。そして、活動の成果として子どもたちの笑顔が見られることが何より喜ばしいことです。

竹林資源の農業利用と活動の波及

じぞくかのう さとやま たい
持続可能な里山めざし隊

設立年：令和4年度 構成員：5名

活動地域：鹿児島県大崎町 林種：竹林

活動実績(令和6年度)：竹林整備(1.3ha)

交付金 319千円

資源活用内容：竹炭、チップ、堆肥(雑木・竹)、タケノコ、土留(竹)

Email: koichi.i-boy@extra.ocn.ne.jp



活動の概要

志布志(しぶし)湾に面した鹿児島県大崎町(おおさきちょう)神領(じんりょう)は、里山や田畑が広がる農村地帯です。高齢化や人口減少が進む中、不在村地主が所有する山林では、倒木や竹の過剰繁茂が見られ、野生動物の潜み場となった結果、野生動物による農作物

物の被害などが深刻化しています。活動地は、約半世紀にわたり手入れや活用がされてこなかった里山林で、落葉・落枝が地表に堆積し、土壌の富栄養化が進み、侵入したモウソウチクが拡大していました。また、活動地は、水田の用水路に面しているため、水路や水田に倒木や枝葉が流れ込んだり、枯れ竹や倒れた竹が水路を覆うため、水路の維持管理のための撤去作業が農家の大きな負担となっていました。このような背景から、令和4年に町内在住者や農業従事者が「持続可能な里山めざし隊」を設立し、本交付金活動を開始しました。竹の本数を5,000本/haにすることを目標に、侵入竹や荒廃竹林を整備しながら、竹林資源の域内利用を促進しています。



整備前の竹林と枝葉が入り込んだ農地脇の用水路

森林資源を隣接農地で循環利用

竹林の整備を開始するにあたり、不在村の森林所有者などに対し、用水路や水田への倒木の実情や竹林整備の必要性を説明し、理解と納得を得た上で、管理に関する協定を締結しました。本活動組織には、代表を含め、営農に直接携わる構成員がいることから、整備によって生じた竹林資源を隣接農地で有効活用し、地域内での資源の循環利用を推進しています。

活動の成果・効果(アウトプット・アウトカム)

▶ 竹林整備で生物多様性を回復

整備で出た竹材は、無煙炭化器で竹炭に、青竹や雑木はチップにした後に堆肥化して、地域の水田や畑で利用しています。水田では、化学肥料使用量を8割削減でき、ゲンゴロウ、ミズカマキリ、タイコウチなどの希少な水生昆虫が見られるようになりました。竹林の整備が進んだだけでなく、隣接する水田における生物多様性の回復にもつながっていることが実感できています。



無煙炭化器(左)と焼いた竹炭(上)

➤ タケノコの収穫と収益確保

竹の本数が、5,000本/haになった結果、林内に光が入るようになり、景観が改善されるとともに、タケノコが生育する環境が整いました。発生したタケノコは加工原料向けや地元の青果市場に出荷し、収益を得ることが可能な段階まで整備されました。伐採された青竹は、土砂が水路に流れ込まないように、土留めとしても利用しています。水利組合から用排水路の保全作業が楽になったと感謝されるようになりました。

➤ 里山林保全活動の横展開

隣接する志布志市から見学に来られた方々が新たな活動組織を立ち上げるなど、本交付金活動での取組が隣接市町村における活動組織新設の契機となっており、地域を超えて、里山保全活動が広がっています。



青竹チップの堆肥を使って採れたお米とタケノコの生育環境が整った竹林(上)、効率的な竹炭づくりのためのチップパーによる粉碎作業(下)



活動上の課題、その対応策等

- 竹炭づくりは、以前は、伐採竹の状態ですら約1年かけて乾燥させた上で、無煙炭化器で炭化していたため、この手間と時間を省くことが課題でした。これを伐採後チップパーで粉碎し竹林へ敷きつめることで乾燥期間が省け、作業効率を大幅に改善することができました。
- 近隣地区の竹林周辺では、イノシシによる農作物被害が拡大しています。この対策として、比較的平坦でタケノコ生産が可能なエリアの竹林を囲む電気柵の導入を図るとともに、法定猟具を使用できるように「わな猟免許」を取得しました。箱罠の設置については、今後具体的な検討を進める予定です。



今後の展開

- かつて日本の里山では、近隣の農地と密接に結びつき、資源の循環利用によって持続的な農林業が営まれていました。こうした森林・竹林の資源管理と持続的な利用を参考にしながら、これからの農林業の姿を考え、地域関係者を巻き込みつつ、本活動を継続していきたいと考えています。
- 大崎町では、毎年、町内外の子どもたちによるカブトムシ相撲大会(今年度37回目)が催されていますが、近年、大会用のカブトムシの確保に苦慮しているということです。そこで主催者に提供するため、竹チップを使ったカブトムシの幼虫生育場の設置を検討しています。

他の活動組織への一言アドバイス

域内循環の仕組を構築するには、地域の人々が求める竹林や森林資源の活用方法を見つけることが大切です。青竹や雑木の堆肥を隣接農地で活用し、できた米と野菜を地元店舗で地域資源の循環の意義を伝えながら販売しています。整備によって生じた資源の販路を模索するなどして、活動基盤の改善に務めることも大切です。

本交付金を利用してよかった！

本交付金活動を進めることで竹林整備の知識や技術を習得でき、資源活用の具体的なビジョンが描けるようになったことは大きな収穫でした。3年間の取組による里山の変化を周辺の山主などにも見てもらうことができ、この成果が今後の新たな動きにつながることを期待しています。

森林・山村多面的機能発揮対策交付金
優良事例集（令和6年度）

発行 林野庁 令和8年3月

作成 公益財団法人 日本生態系協会